

本を通した新たな交流施設における交流の実態に関する研究

— 静岡県焼津市「みんなの図書館さんかく」を対象として —

1882041 長谷川 帆奈

指導教員 高見沢実教授 野原卓准教授 尹莊植助教

1. 研究の背景・目的

近年、出版不況やそれに関連する書店の廃業、本を読まない人の増加など、本を巡る施設が変革期にある一方で、本を用いた新たな施設が増加している。それらの施設は従来の本屋や図書館のように、本を売ったり貸したりする場として利用されるだけでなく、交流の場としても活用されており、今までになかった人と人との繋がりを生んでいる。

このような本を用いた新たな施設の一つに、静岡県焼津市の「みんなの図書館さんかく」がある。この施設はまだ開館してから日が浅いことに加え小さな空間であるが、地域コミュニティやまちの活気など、より大きなものに変化を与え始めている点でとても興味深く、現在注目浴びている。

そこで本研究では、この静岡県焼津市にある「みんなの図書館さんかく」着目し、その施設の実態を明らかにすることを目的とする。また、施設内部での交流に着目し、その実態と交流の起こるきっかけについて考察する。

2. 研究の方法

初めに、次章において本と交流に関して近年増加している動きを、本を用いた交流施設を中心に概観し、研究対象施設の位置付けを行う。次に4章において対象施設の基礎情報について調べ、それを踏まえて利用者へのヒアリング調査と観察調査を行い、施設がどのように利用されているかについて明らかにする。5章においては施設内での交流に着目し、その特徴と交流の生まれるきっかけについて考察、実態について明らかにする。

3. 本に関する交流施設の概観

近年、公共・私設問わず、まちづくりや地域住民の交流を志向する、本に関する施設が増加している。公共図書館に対しては、まちづくりや地域活性化を支える役割としての期待が高まっており、私設の図書館や本屋にも本を通して人々の出会いや交流のきっかけにしようとする動きがある。その中でも大きな動きとして、メッセージをつけた本を持ち寄り、街のあちこちに小さな図書館を作り、人と出会い、交流しようという「まちライブラリー」という活動がある。本研究における対象施設はこのまちライブラリーの中の一つであるが、寄贈による一般的な本の収集方法を用いずに、独自の本の収集方法である一箱本棚オーナー制度を取り入れている点で特徴的な施設である。

4. 対象施設の調査

4-1. 対象施設の概要

対象とする施設は静岡県焼津市栄町の焼津駅前商店街内に位置している私設の公共図書館、「みんなの図書館さんかく」である。2020年3月3日に運営者である土肥氏が自分の事務所兼ブックスペース・交流スペースの空間として開館し、スポンジ化する都市の「私設公共空間」をコンセプト

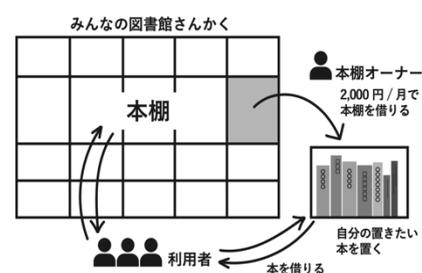
に、行政や公共サービスの「公」のレイヤーと、市民生活の「私」のレイヤーの間の新しいレイヤーとして「共」のレイヤーとなる施設を目指して、場所づくりに取り組んでいる。

4-2. 仕組み

4-2-1. 一箱本棚オーナー制度

一箱本棚オーナー制度とは、みんなの図書館さんかく内に、自分がプロデュースする独自の本棚を持つことができる制度である。希望者は、月額2,000円を支払うことに

図1.一箱本棚オーナー制度関係図



より、本棚オーナーになることができる。本棚オーナーには、施設内の壁に設けられた本棚の一角が与えられ、そこで基本的には本の貸し出し、加えて一部本やその他本に関連する商品の販売を行うことができる。現在は58人が本棚オーナーとして契約しており、本棚には空きがない状態である。

4-2-2. 小さなチャレンジプラットフォーム

施設入り口の商店街に面したスペース、「小さなチャレンジプラットフォーム」でお店を持つことができるシステム。飲食の提供も可能で、露天販売の許可証があれば誰でも無料でお店を持つことができるが、代わりに施設のお店番も担当することとなっている。

4-3. 施設利用者の実態

4人の一箱本棚オーナーに対してヒアリング調査を行った。ヒアリングの際は、本棚オーナーになった理由や本棚への思い、他の利用者との交流に着目する。(表1)

5. 交流の実態について

5-1. この施設における交流の特徴について

ここに訪れたら誰もが必ず他の利用者などと交流をしているということが分かった。またその内容については、基本的に本をお勧めしあったり共通の本について話したりするなど、本に関する話題で交流が起こる事が多い。しかしそれだけではなく、本以外にも様々な話題で交流が起こっているということがわかった。また、この施設で本をきっかけに始まった交流はこの施設内に止まらず、施設外での交流に発展している例もあった。また、交流の際には相互に対等な立場で交流を行っているということがわかった。

5-2. 交流のきっかけの分析

この施設において交流が起こるきっかけとなったポイントを3つに整理し、それらをきっかけとして起こった交流の特徴について分析するとともに、きっかけとなり得た要因についての考察を行う。

表 1.本棚オーナーヒアリング結果

	A	B	C	D
なつた理由	もともと知り合いだった土肥さんから当該施設のクラウドファンディングについて聞き、面白そうだと感じ協力したいと思ったこと。	本が好きだから。読んだ本を人に勧めたくなくなる。お金払って本棚を借りて自分の好きな本を置いていいのなら是非やりたいと思った。	昔から本がすごく好きでよく読んでいたこと。転勤族で行く先の街にいつも自分の居場所がなく、少し寂しさを感じていたこと。	この街の面白い動きを探していた時にこの施設を見つけた。昔からかなりの本好きで読み終えた本を活かせると思った。
本棚の様子 (写真)				
本棚のこだわり	同じ職場の4人でひとつの本棚を借りている。それぞれがみんなに読んでもらいたいと思った本を各々置いている。Aさん自身は、主に自分が著書に関わったものを置き、自分の本をアピールしたりしている。	自分が読んで好きだった本を置いている。色々な人に楽しんで読んでもらえるよう、頻繁に来館しようという本がよく貸し出されるのかをリサーチしている。勧めた本を読んでもらって楽しんでもらえるのが本当に嬉しい。	自分の好きな本を置いて、来れば少し気分が上がるような、自分の好きなものが詰まった一箱にしている。	今自分の中で、身につけて行っているものがある天体に関する本だけを置いている。貸し出すからには自分が自信を持って貸したいと考えているので、自分の中に知識としてどんな取り込んでいるものを貸したい。面白さや楽しさを伝えたいと思っている。
誰かと交流は	来ると誰かしらと会話を楽しんでいる。	全然今まで知り合なかった人とも交流することができて楽しい。互いの年齢のことなどあまり気にせず、タメくらしい感覚で話している。	来れば誰かしらおしゃべりしてくれる。	来れば必ずやっている。ここで友達ののども増えた。施設内以外でも交流をしている人がいる。
交流のテーマ	基本は「これ面白いよ、読んでみて！」がコミュニケーションのきっかけになることが多い。自身は有名な方のサイン本を置いて、それを他の利用者に見せたりしている。このサイン本はAさん自身が本棚オーナーをしているもうひとつの姉妹館でのイベントで買ったものであり、そこからその姉妹館の話に発展することがよくある。	本に関係することばかりを話すのかといえば、そうでもない。全然関係ない他愛の無い話をすることもある。本の話をするのも大好きだけど、こうして普段は話せないあるいはこの場がなければ話せない、色んな人と話せるのがとても楽しい。	回答得られず	自分の棚のテーマである天体についての話で盛り上がることも多いが、ここに来る人は興味が広い人が多いので、それ以外でも様々な話題で盛り上がる。まずはこの「本」というキーワードが重要で、あとは色んなものに興味がある人たちに交流が広がっていくことが、(この施設の中では)多いと感じている。

5-2-1 一箱本棚オーナー制度

主な交流の特徴として、①本を勧める②本棚についてアドバイスし合う③共通の本について語り合う④まちの本屋として利用者と公共図書館とを仲介する、4種類の交流が起こっていた。また、交流が起こるきっかけは、本棚オーナー側と本の借り手との間に、何かを発信したい人(本棚オーナー)がいて、新しい何かを楽しむ/求める人(借り手)がいるという関係性が生まれていることであると考えられる。

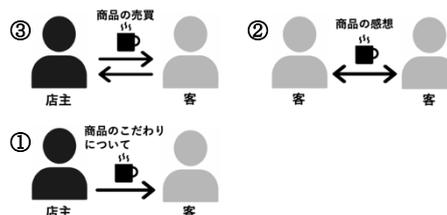
図 2. 一箱本棚オーナー制度による交流



5-2-2 小さなチャレンジプラットフォーム

主な交流の特徴として、①商品購入の際のやり取り②客同士で商品について感想を述べる③店主から商品のこだわりについて聞く、3種類の交流が起こっていた。また、交流が起こるきっかけとしては、売り買いという行為に必要な不可欠なやりとりであることが多いが、それだけでなく、一箱本棚オーナー制度と同様に、こだわりを発信したい人(店主)と、新しい何かを楽しむ/求める人(お客さん)という関係が生まれていることもきっかけとなっていると考えられる。

図 3. 小さなチャレンジプラットフォームによる交流



5-2-3 交流施設としての役割

対象施設は、この地域における交流施設としての役割も果たしており、ここにおいては利用者同士での世間話を交わす交流が起こっていた。交流が起こった要因としては、利用者にとって、この施設が本に触れる場所という認識をこえ、交流施設として本に関係のない日常的な会話をする居場所としても認識されていることであると考えられる。

5-3 交流を受け止める工夫

ここまでで明らかにした交流について、その発生を促し受け止めるための空間の工夫と振る舞いの工夫について運営者の土肥氏へのヒアリングの結果をもとに述べる。

空間の工夫は、入り口のある商店街に対してオープンなこと、施設内の床がフローリングで、靴を脱いで入館するということの2点である。また、ふるまいの工夫としては、分かりやすい看板を掲げること、挨拶をすること、日常的な場としての利用を心がける、の3点が挙げられる。

6. 結論

2020年に土肥氏がみんなの図書館さんかくを開館してから、様々な思いを持った人が本棚オーナーや小さなチャレンジプラットフォームの店主、施設の利用者としてこの施設に集まり、本を介した交流から世間話を交わすまで、様々な交流が生まれていることがわかった。一箱本棚オーナー制度や小さなチャレンジプラットフォームのシステムを有し、交流施設としての役割を担うことによって自然と生まれる交流を、居心地の良い空間づくりの工夫や管理サイドのふるまいの工夫によって、さらに促し、またそれを受け止めることで、本に関する話題をはじめとした様々な話題について気軽に、対等に話すことができる交流施設となっている。

主な参考文献

- 磯井純充(2020.3)「“まちライブラリー”を活用した地域の場づくりに関する研究：『個』の活動が活かされる社会への道程」
- 磯井純充(2015)『本で人をつなぐ まちライブラリーのつくりかた』学芸出版社

